



5 沙津樹のこと

堅い話が続いたので柔らかい話をする
ことにしたい。しばらくの間、介護福祉とは異
なる内容となるがお許しいただきたい。

(1) 小学校から中学

第一回目に少し書いたことだが、私は 42
歳の春に同い年の配偶者を亡くした。その
時、二人の子どもがいて、上の男の子は小学
校 4 年生、下の女の子は小学校に入学した
ばかりであった。どのような事情で亡くな
ったのかはここでは述べないが、二人の子
どもにはいろいろと大変な思いをさせるこ
とになった。特に下の女の子である沙津樹
は、大変だったと思う。沙津樹にとっての愛
着形成の時期に母親が亡くなり、父親であ
る私はそうした児童心理についてはまったく
疎かった。にもかかわらず、ほぼ奇跡的に
まっすぐに育ってくれたことに感謝してい
る。

仕事を続けながら二人の子どもを育てる

ために、私たちは義父母の家の近くに引越
しして、子どもたちは朝、引越した家から
学校へ通い、帰ってきてからは祖父母の家
に行って晩ご飯を食べさせてもらう生活が
続いた。沙津樹は、絵を描くのが大好きで暇
さえあれば近くにある白い紙に何かを書い
ていた。小学校の高学年当たりから父親で
ある私に対する若干の反抗期もあったが、
中学生になると買っておいた惣菜等を自分
で弁当に詰めるようになった。また漫画を
描くようになり、絵を描くことへの関心は
さらに高まっていった。

中学では、特に勉強していたわけではな
いがクラスで真ん中より少し上程度の成績
だったように思う。中学 2 年の頃、祖父が
1 か月の入院の後に亡くなった。中学 3 年
の春、高校進学について考える時期になっ
て沙津樹から出た希望は、県内の公立高校
で唯一美術コースのあるところへの進学だ
った。亡くなった母親が小さい頃、絵を描く
ことが大好きだったことを祖父母から聞か
されていたのかもしれない。少し複雑な思

いがあったが、それもいいかと考え、希望をサポートすることにした。公立高校の入学試験に前期、後期ができて間もない時期であったが、前期の入試で無事に合格した。

(2) 高校で

高校とはいえ、美術コースではデッサンの基礎をしっかりと学び、夏休みになると泊まりで写生にも出かけていた。しかし、しばらくすると絵を描くことへの関心が薄れて行くのが分かった。2年になると美術コース全体でイタリアへの研修旅行があった。

「最後の晩餐」などを見るとともに、イタリアの姉妹校との交流が主な目的だったが、研修旅行の前後、沙津樹の醒めていることが気になった。

高校生の間、沙津樹は箏曲部に所属していた。中学まで琴に触ったことはないはずなのだが、高校に入ってすぐに琴を始めた。後になって分かったことは、進学した高校の箏曲部は、県大会の上位常連校で、毎年、高文連の全国大会に参加していた。箏曲の合奏のチームに入れば、全国大会に出場できると考えたようである。実際に、2年生、3年生の2回、全国大会に出場している。本人いわく、高校生の時は、本当に毎日、琴を弾いていたという。高校の文化祭での演奏を聞きにいったことを覚えている。

高校2年の夏ごろからであったろうか、予備校に通いたいというようになった。話を聞いていくと、高校の授業の中で特に倫理が面白く、大学では哲学を勉強したいというのである。漫画から美術、美術から箏曲、そこから哲学という目まぐるしい変化であった。

予備校の現役生向けのコースに通うよう

になったが、そこでの成績はよく分からない。それまで、真剣に勉強してきたわけではないので、そこそこの成績だったのではないだろうか。その時点では、沙津樹が最終的に目指した大学に合格できる状況にはなかったと思う。しばらくすると志望大学を絞り込み始めた。AO入試の出願条件を調べ、自分に可能性のあるところを探し出し、英検2級と高校の評定平均4.0を条件としている大学の哲学科を目指す目標とした。

3年生の初夏に受けた英検で何とか2級をクリアし、評定平均も4.0を超えることができた。秋にはAO入試を受けこれまた合格することができた。AO入試では、本人及び高校からの志願理由書や成績等の書類と面接で合否が決まる。当然のことだが、面接する教員の興味を引く面白いキャリアの受験生が有利になる。沙津樹のように、ごく普通の県立高校で美術コースに在籍し、箏曲で全国大会の出場経験があるというのは、本人はそうは考えていなかったようだが、極めて有利なバックグラウンドであった。

(3) 哲学科へ進学して

大学では、哲学科ではあったが正確には臨床哲学といわれる分野のうち、ターミナルケアやグリーフケアに関心があったようである。専門科目が始まるまでの2年間、リベラルアーツ系の科目はあまり面白くなかったと思われる。高校時代、英語には少し自信があったようなのだが、英語のクラスを能力別に設定している大学では、成績の良い英語のクラスには入れず、また心理学などはすべて英語での授業で苦勞していた。あまりよい成績ではなかったが、4年生になる頃から大学院への進学を希望するよう

になった。

大学院に入るとともに、「ランパスの会」という病院ボランティアのグループに入り、週に1回、神奈川県立がんセンターに通うようになった。修士論文を書くに当たって、ターミナルケアの現場を自分の目で見ておきたかったようである。

なぜ大学院への進学を希望したのか、想像だが、早くなくなった母親が当時としては珍しく大学院で中国語を学んでいた。母親のことを祖父母からいろいろと聞かされていて、自分も大学院進学を考えたというのが一つめの理由であろう。もう一つは、大学での勉強に納得がいかなかったことらしい。ただし、博士後期課程まで進学して研究者や大学教員を目指す気持ちはまったくなかった。大学院の面接試験では、前期課程修了後は介護福祉施設で働きたいと答えている。

大学院博士前期課程を2年で修了し、教員の勧めもあって大学に附置されているグリーンケア研究所でリサーチアシスタントとして1年間お手伝いをするようになった。研究所の所長である島藺進先生や、スピリチュアル学会の仕事で日野原重明先生、柏木哲夫先生と関わり、スピリチュアル看護の河正子先生などとも話をする機会があったようである。これまた本人はあまり意識していないのだが、この分野の日本を代表する人たちと25歳の時点で繋がっていたあというのは、とても大きな財産であろう。

リサーチアシスタントとしての一年間の後半、自らすすんで介護職員初任者研修を受けに行った。大学、大学院での勉強に比べて使用しているテキスト、練習問題のレベルが違うことにより戸惑っていたが、約

半年間研修に通いその後、私の母親が晩年を過ごした特別養護老人ホームを訪ね、就職を果たした。施設長をしていた方が、私の母を覚えていて、割とすんなり就職は決まったのだが、法人の皆さんには異邦人に見えたのではないだろうか。大学院を出てそのうえで介護の現場に入ってくる人間に対し、現場の人たちの思いはどのようなものであったろうか。

勤め始めて3カ月ほどする頃、沙津樹から相談があった。どうやら先輩職員からあれもできない、これもまかせられないと、有りがちな可愛がられ方をしたようである。法人の方で配慮してくれ、一か月休んだ後、養護老人ホームの担当となった。この後は、養護のお年寄りのケアに早く溶け込み、翌年の3月末まで勤めた。

沙津樹には、大学時代から交際していた人がいて、その彼と結婚するため4月2日に栃木県に引っ越ししていった。本人は結婚式も考えていたようなのだが、相談された私は、結婚するのはいいけれど、お願いだから結婚式はやめてほしいと懇願した。どう考えても花嫁の父として泣き出すに違いない。私の思いを察してか、彼の両親と東京で会食をするだけで二人は結婚した。結婚から一カ月程すると、沙津樹は新居からほど近い社会福祉法人を訪ね、パートで介護の仕事を再開した。本人は、540日以上勤務した後、介護職員実務者研修を受講して介護福祉士国家試験を受験したいと考えているようだった。

月に一〜二回、祖母の顔を見るために帰ってくる生活が一年四か月ほど続いたのち、祖母の88回目の誕生日が過ぎてしばらくしたところで、祖母は入院した。一週間の入

院の後、祖母が亡くなった。二人の子どもたちは、病院で臨終に立ち会った。夏の厚い時期でもあったので、そのあとすぐに通夜と告別式を行い、祖母は旅立った。沙津樹が大学、大学院でスピリチュアルケア、グリーフケアについて臨床哲学の立場から勉強し、さらに介護の仕事を選んだのは、祖母を看取るためであったことを、彼女の口から聞くことができた。覚悟は出来ていたようではあるが、それでも沙津樹の目に涙が溢れる場面があった。

(4) 沙津樹たちのために

私は、大学で社会福祉学科の教員をするとともに、10年前から介護福祉士の国家試験に関わってきている。その中で、介護福祉に関して様々なことを考えてきた。

一般的には、介護は3K（きつい、汚い、給料が安い）といわれ続けてきた。そうした中で、志を持った若者が介護福祉の仕事に積極的に選択してくれるようになるには、どうしたらよいのか、これは、私たち社会福祉に関わる者たちに課せられた大きな課題である。しかしながら、いわゆる社会福祉に係る大学教員はあまり関心がなさそうにみえる。あたかも介護福祉は、社会福祉の中に含まれていないかのようである。

一方で、学内の介護福祉の教員と議論をしていて、介護福祉に対する積極的な意味付け、若い人が自ら介護福祉を選ぼうとするためのインセンティブとなるような言説があまり出てこないのも気になるところである。「介護福祉は楽しい」「介護は面白い」というような言葉は聞かれるのだが、どこが楽しいのか、なぜ面白いと思うのかまで言説化しなければ、その思いを伝えること

はできないのではないかと。

沙津樹だけでなく、私の勤めている大学で介護福祉を学び現場に出て行く学生のように、若者たちが積極的な動機に基き介護福祉の道を自ら進んで選ぶ社会をつくるためには、単に3Kを否定するのではなく、また「介護福祉は楽しい」「介護は面白い」というレベルでもなく、介護にはどのような意義があるのかを、積極的に言語化、言説化することが求められている。

あえて生意気なことを述べるが、社会福祉の分野、ましてや介護福祉の分野でそれを担える人材は残念ながらほとんどいないと思われる。私は、大学で社会福祉を学んだことはない。ましてや介護福祉の理論を学んだことも、実践を経験したこともない。だが、昭和63年4月に高齢者福祉の仕事に関わり始めてから約30年に渡り、仕事として社会福祉のことを考え続けてきたし、その約半分の期間は介護福祉に関わっていた。大学教員としての私に残された時間は次第に少なくなってきたが、残った時間の中で介護福祉、さらには対人援助に関し、私なりの考え方の整理を試み、若い人に引き継いでいくことが残された大きな宿題である。

次回以降は、こうした課題意識の延長線で考えてきたことについて述べることにしたい。